

## notice 令和元年度 北海道開発局 優良工事等表彰を受賞

(一社)北海道開発技術センターは、今年度も北海道開発局優良工事等表彰を受賞しました。業務名は以下の通りです。いただきました評価に恥じないよう、今後もみなさまの信頼と満足を得るために、職員一同、より良い成果品とサービスを提供してまいります。引き続きご指導のほど、宜しくお願い申し上げます。

### ◆北海道開発局長表彰:

函館新外環状道路外 道路事業資料作成業務(函館開発建設部)

### ◆開発建設部長表彰:

釧路開発建設部管内 吹雪対策高度化検討業務(釧路開発建設部)



北海道開発局長表彰の受賞者(前列左から3人目:山口理事長、山本参事)



表彰を受ける山口理事長



表彰を受ける山本参事



開発建設部長表彰の受賞者(前列右から3人目:金田統括部長、山口理事長)

## 編集後記

かなり暑い日が続いています。窓を開けて寝ても寝苦しくて起きてしまい、ここ数日は寝不足気味。。。こんなことは生まれて初めてかもしれません。それでもお盆を過ぎたら秋の気配がしてくるのでしょうか。。。しかし、この暑さも期限があると気付いてしまうと、途端に寂しく思ってしまうのは私だけでしょうか?なんとも勝手です(笑)さて、マンスリーもようやく8月号。今月号はジャイカ、キルギス、ベトナムと、国際色豊かな内容でお届けいたします。(R,W)



# dec monthly

2019.8.1 vol.407 デックマンスリー



### ● Monthly Topic (マンスリートピック)

道路付帯施設セミナー調査団としてのキルギス共和国訪問

### ● dec Report (デックリポート)

ベトナム×北海道 人的交流セミナー

dec Interview >>> JICA北海道 所長 齊藤 顕生 氏

JICA北海道(札幌・帯広)は、1996年の設立以来、途上国から約1万6千人の研修員を受け入れ、逆に北海道から世界へ2600人余のボランティアを送り出してきました。今年4月就任の齊藤顕生所長は札幌市出身。豊かな海外でのキャリアやJICA北海道の役割についてうかがいました。

学生時代の米国に始まり、海外各地で仕事をされてきました。小樽商大卒業後、東京銀行を振り出しに開発金融のエキスパートとして活躍されてきたのですね。

小さいころから英語が好きでしたが、中学・高校の教科としての英語は好きになれず、大学進学後、自由に英語を学び直そうと英会話学校に通いました。大学3年のときに大学を休学し、米国ミネソタ州に公立学校のインターンとして1年間滞在。幼稚園から高校まで一体型の学校で、社会科の先生と組み、子どもたちに書道や折り紙など主に日本文化について教えました。最初は言葉も通じにくく苦労しましたが、留学生のように教わるという受け身の立場ではなく、自分の方から教え、相手に働きかけるという、とても貴重で面白い体験ができたと思います。

大学卒業後、海外とつながりある就職先を選ぼうと、外国為替専門銀行である東京銀行(現・三菱UFJ銀行)へ。最初に勤務した支店の取引先に海外経済協力基金(OECF)があり、それが途上国支援のための開発金融に出会う最初の接点

となりました。間もなくポルトガル語の語学研修生としてブラジルに3年ほど派遣され、インフラ整備の遅れなど途上国の実情を目の当たりにするなかで開発金融の仕事への意欲を高めました。日本に戻ってからOECFに出向となりましたが、出向中にOECFは日本輸出入銀行と統合して国際協力銀行(JBIC)に。私は2001年、東銀を離れてJBICに転職し、インド課の配属となりました。折しも9.11(米国同時多発テロ)を契機に、インド向け円借款が再開され、猛烈な激務を経験。さらにニューデリーに赴任して3年を過ごし、5年ほどインドにどっぷりでした。

08年、JBICの国際金融部門は日本政策金融公庫へ、海外経済協力部門はJICA(国際協力機構)へと分離統合されたのですが、私はJICAへの転籍を選びました。それは、これからの途上国支援には「人づくり」が重要になると感じたからで、日本最大級の「人づくり」の公的機関であるJICAで働こうと思ったのです。

2008年にJICA入構後、トルコ事務所長(2011~14年)、ブラジル事務所長(2017~19年)を務められました。どんな事業を手がけられたのでしょうか。

トルコについてはJBIC時代を含め通算7年担当し、円借款事業として大型インフラ案件の形成や事業監理に携わりました。ブラジルでは、OECF出向時に「日伯紙パルプ製造事業」などにかかわり、JICAでは技術協力事業や日系社会との連携促進など幅広く経験しました。

来日外国人が増加するなか、北海道の発展には外国とのつながりを強化し、協働する姿勢が必要です。そこに私たちの国際協力の経験やネットワークが役立つと考えています。

## dec Interview

### さいとう あきお

1964年札幌市生まれ。89年小樽商大卒業後、東京銀行へ。ブラジル現地法人への派遣、海外経済協力基金への出向などを経て、2001年国際協力銀行に転職。インド赴任などを経験し、08年国際協力銀行の分離統合に伴い、JICAに転籍。トルコ事務所長、ブラジル事務所長などを歴任し、19年4月から現職。趣味は少年時代から親しむスキー。



振り返って特に思い出深いのは、トルコで調達、事業監理、完成までの各段階を経験した「ボスボラス海峡横断地下鉄整備事業」です。イスタンブール市はこの海峡を隔てて欧州側とアジア側に分かれ、それをつなぐ橋梁の交通量は多く、渋滞や大気汚染が深刻化していました。海底トンネルによる大量輸送が悲願でしたが、日本企業の技術力で2011年、13.6kmのトンネルが完成。工事は潮流が速く、船舶交通量の多い海峡に沈埋函13個を敷設するという難事業である上に、駅舎建設現場からはオスマン帝国時代から古代ローマ時代の文化財が多数出土するという対応でも異例の大事業でした。無事、2013年10月、トルコ共和国建国90周年の記念日に地下鉄開通式典を迎え、安倍首相とエルドアン首相が一番電車に乗り、トンネル最深部に記念プレートを設置しました。このような国家的な大偉業に立ち会うことができたのは幸せなことです。



トンネル最深部にて記念プレート設置の様子

トルコでは「イスタンブール長大橋耐震補強事業」や「イスタンブール上水事業」も手がけましたが、私たちの役割はできるだけ早く円滑に、そして安全に事業を進めるために相手国や関連機関に働きかけて進行管理すること。早く完成して供用されると相手国の便益がそれだけ早く生じるわけで、そのためにあらゆる努力をします。

苦労は多いのですが、嬉しいのは、このような大事業を重ねるなかで相手国の技術者が育っていくことです。トルコでも、かつて日本企業とJVを組んだ企業や日本に研修に来た技術者たちが、今は世界的なプロジェクトを手がけるようになっていきます。

**JICA北海道が取り組んでいるのは、途上国からの研修員受入をはじめ、青年海外協力隊などのボランティア派遣、自治体などによる草の根技術協**

**力の支援、そして開発教育の推進など。まさに「人づくり」最前線ですね。**

東京以外では初めての国内拠点勤務で、目下、一生懸命、勉強させてもらっている最中ですが(笑)。JICAの活動は海外での展開が目立つかもしれませんが、途上国の行政官などリーダーたちを受け入れ、彼らが学んだことが母国の政策などに生かされるという意味で、国内拠点こそJICAの最先端です。

北海道では、寒冷地のインフラ整備・維持管理や農業、畜産、水産業に関する技術など地域特性を生かした研修を実施しており、最近では観光開発や防災、エコ・ツーリズム、道の駅、農業の6次産業化やICT技術活用など幅広いテーマを取り上げています。研修員の約50%がアジアから。特にキルギス、タジキスタン、モンゴルなど北海道と気候が類似する諸国からの受け入れが多いですね。

研修プログラムには道内自治体や研究機関、民間企業の協力が不可欠で、decさんにも長く協力いただききました。さらに多くの団体・機関、また市民がJICAをより身近に感じていただけるよう努力していきたいと思っています。



研修プログラム

**JICAは中小企業の海外展開支援にも注力されています。decも中央アジアへの吹雪対策の技術移転などでお手伝いしてきました。**

近年、JICAが力を入れているのが民間企業との連携です。特に中小企業の製品や技術が途上国の開発に生かされるよう支援していますが、北海道の企業さんは非常にシャイで、公募してもなかなか名乗りを挙げていただけない。北海道は行政主導で開発が進められ、輸出をけん引するような製造業の育成が後手になってしまったからかもしれません。

私たちは中小企業の海外展開に向けた基礎調査から案件化調査、普及・

実証事業まで各段階において費用面、アドバイス面で支援を行っており、道内の企業さんには海外進出の足がかりとして活用いただきたいところです。少しずつですが、日東建設さん(本紙インタビュー2016年8月号参照)や理研興業さん(同2019年2月号)のように、研修員受入事業への参加をきっかけに途上国での製品ニーズをつかみ、海外進出に意欲的に乗り出す企業さんが出てこられるようになりました。研修に協力いただいている企業さんには「研修だけでなく、海外に打って出ませんか」と呼びかけたいところです。

**今後のJICA北海道の取り組みとして関心を寄せておられることは何でしょうか。**

また、具体的な取り組みに及んでいませんが、近年、増加する就労外国人の問題については私たちがお役に立てることがあるのではと思っています。国内には群馬県大泉町や静岡県浜松市など、かなり以前から日系ブラジル人の出稼ぎを受け入れ、地域社会で共生への努力が重ねられてきたところがあります。そうした経験のない北海道で、今後、就労、定住する外国人が増加すると、さまざまな問題が生じる可能性があります。JICAは途上国と太いパイプを持っているから、就労外国人の出身国と北海道がウイン・ウインの関係になるようなかたちを探り、地域とともに何らかの対応策を考えていきたい。そのために道内各地に足を運び、自治体さんとも率直な意見交換ができればと思っています。

もう一つ、ぜひ関心を持っていただきたいのは、今年は北海道からのブラジル移住が始まって100周年の記念の年であること。90周年の際には安平町から冷凍輸送で雪だるまが贈られ、現地の方々に大変喜ばれましたが、今回は胆振東部地震の義援金への返礼も兼ねてサンパウロに贈られ、「北海道人ブラジル移住100周年記念式典」で披露される予定です。こうした大きな節目にブラジルの日系人と道民との交流がビジネス面も含めて進展していくことを願っています。

来日外国人の一層の増加が予想されるなかで、今後の北海道の発展には外国とのつながりを強化し、協働していく姿勢が必要です。そこでのJICA北海道の果たすべき役割を考えていきたいと思っています。

## 道路付帯施設 セミナー調査団としての キルギス共和国訪問

キルギス共和国は山岳が国土の9割を占める山岳国です。国内移動や運送は自動車為主であり、山岳部や峠部の歪曲した道路、冬期の厳しい走行環境、長時間にわたる運転など、道路交通の安全性確保が課題となっています。2019年2月。当センターの原地域政策研究所所長と永田首席研究員の2名が、JICAキルギス事務所から「道の駅セミナー」の講師としての依頼を受け、国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所の専門家2名とともに同国を訪問しましたので、ここに報告させていただきます。

### 道の駅とシーニックバイウェイについて

永田 泰浩(調査研究部 首席研究員)

キルギス共和国では、ドライバーの休憩、悪天候時の避難、地域振興の拠点構築を目的として「道の駅」の導入が検討されています。今回の訪問における我々の役割は、セミナーやパネルディスカッションへの参加を通じて、北海道内での「道の駅」における地域振興、観光開発の状況を伝えるとともに、「道の駅」を導入した際の地域住民や活動団体との連携の重要性を伝えることでした。セミナーでは、はじめに、寒地土木研究所の松田様、岩田様から、日本での「道の駅」の政策、制度、運用などについて、詳細な説明がありました。続いて、原所長より、休憩、食事、地域情報、観光情報の収集などの優れた機能を持つ拠点としての「道の駅」と、「道の駅」や観光ポイントなどの拠点と連携し、線的な広がりを持たせる「シーニックバイウェイ」の役割を説明しました。永田は、実際にルートコーディネータとして

活動支援や調整を行っている「釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ」の活動内容とその効果などを説明しました。今回は、セミナーやパネルディスカッションの前に、現地調査が組み込まれており、事前に現地状況を確認することができました。美しい景観の足元にある多くのゴミや、観光客が利用するにはかなり汚いトイレ、道路沿いで名産品のシーバクソンジュースを販売する露店など、現地の写真を発表資料に組み込んだことは、セミナーで「道の駅」や「シーニックバイウェイ」の取組の目的を説明する上で効果的であったと思います。現地調査では、道路の清掃活動を自主的に実施しているドライブインがあることもわかりました。道路や付帯施設の整備が地域振興のきっかけとなったとしても、その取り組みを継続していくためには、その地域の人々の想いが重要になることも伝えられたと思っています。



未開拓の美しい景観が広がる



写真上: パネルディスカッション後、質問を受ける原所長



写真左: 休憩施設のトイレ  
写真下: 現地の特産品を販売するお店



清掃活動なども実施していたドライブイン



セミナーでは、日本からの発表だけでなく、キルギスの観光局のプロジェクト報告や、視察地域もあり、今回、我々が訪問した理由でもあるロードサイドサービスの向上がテーマとなっていることから、イシク・クル地域の観光プロジェクトと、現地の状況について簡単に紹介します。

## キルギスの観光地域づくりと日本の協力について

原 文宏(地域政策研究所 所長)

### イシク・クル湖周辺の観光開発計画

首都ピシユケクの東にある、イシク・クル湖は、琵琶湖の約9倍の広さをもつ山岳湖で、中央アジア各地から多くの観光客が訪れる場所です。キルギス共和国の観光局副局長によれば、世界銀行から支援を受けて湖周辺のキャンピングサービスセンターの建設計画と道路交通の改善プログラムが進められています。湖の周辺5か所にキャンピングサービスセンターが建設される予定になっており、観光情報センターも設置され観光情報の提供、軽食・喫茶、お土産等の販売所、清潔なトイレ、駐車場等が整備される予定で、規模の小さな「道の駅」という印象を受けました。これらの施設は、計画段階で、まだ出来ていません。

視察中に見たロードサイドのサービス施設の現状は、量、質ともに全く足りませんが、ヒアリングした民間のドライブイン「FOOD ZONE」は「道の駅」に近い設備が整っていたことから、このような民間企業と公共が連携したロードサイドサービスの整備を、政策的に誘導していくことが重要と感じました。

### 日本の支援によるOVOP活動

OVOP(One-Village-One-Product)は、日本の「一村一品」運動をJICAがキルギス共和国に導入しました。

視察したイシク・クル湖の南側にある羊毛フェルト製品のワークショップでは、天然メリノウールを伝統的なニードルフェルティング(針でチクチク)の技法を使って、地域の女性たちがハンドメイドの羊毛フェルトを製造しています。製品化には日本企業が参加し、品質管理等の指導をすることによって、質の高い製品を日本等の市場で販売しています。

このようなワークショップがイシク・クル湖周辺に数か所設置されており、羊毛フェルトだけでなくジャム、ナチュラルソープ、はちみつ等の地域素材を活かした商品を地域住民が中心となって製造、販売し、地域住民の所得向上につなげています。このような草の根支援を日本が時間をかけて行っていることに、シーニックバイウェイ北海道の活動との類似性を強く感じました。

さらに、一村一品を使った体験型の観光プログラムや地域を案内するガイドの養成などによって「もの」の販売だけでなく「こと」の販売の展開により、ワークショップを観光振興の拠点にしていくことができることを現地スタッフに伝えました。次回、もしまた訪問できたら、どのように発展しているのか、とても楽しみです。



良く似ているキルギス人と日本人  
(キルギス共和国の道路局長と私)



写真上:「FOOD ZONE」でのヒアリング  
写真下:OVOPで製造販売している商品



羊毛フェルトのワークショップ

# ベトナム×北海道 人的交流セミナー

観光や技能実習生受け入れなどさまざまなつながりが加速しているベトナムと日本。首都ハノイで両国を結ぶ各種事業に取り組む勝恵美氏を講師に迎え、「今のベトナム」を知り、北海道観光の可能性を探るセミナーが開催されました。

2019年4月24日・dec4階大会議室 / 主催:dec、後援:北海道開発局、北海道運輸局、JICA北海道、札幌・ベトナム交流会

## ★特別講演

### ベトナム在住17年の私が語る、日本人の知らないベトナム人の視点



勝 恵美(かつめぐみ):モアプロダクション CEO・チーフプロデューサー

### 経済成長著しく、変わるライフスタイル

ベトナム社会主義共和国は人口約9,370万人(2017)、面積33万平方キロの海沿いの細長い国です。私が暮らす北部の首都ハノイの人口は742万人、南部のホーチミン市は840万人で、これら大都市に農村から人口流出している現状にあります。平均年齢は28歳と若く、昨年の経済成長率は6.8%と伸び盛り。多民族国家でキン族が多いものの少数民族は53に及びます。日本企業の進出も活発で約1800社(日本商工会議所加入企業)、在日日本人は約1万7千人(2018)です。

社会主義国ですが、1986年に「ドイモイ」(刷新政策)で市場経済を導入し、外国資本を受け入れて急速に成長してきました。2000年ごろから著しいのが都市の建設ラッシュ。特に地下にショッピングモールの入った大型マンションが増え、都会的なライフスタイルが浸透しつつあります。こうした都市開発などで注目されているのが国内最有力の財閥

ビングループ。日本企業では流通大手イオンをはじめ、都市開発では現地企業と組むかたちで三菱商事、住友商事、東急などが大規模開発を手がけています。

不動産が高騰してバブルの様相を示す一方で、貧富の格差も広がっています。特に少数民族は貧しく、地域によって最低賃金の差は大きい。大都市部は月額418万ドン(約2万円)に対して最も低い地域は292万ドン(約1万3千円)。増加している中間富裕層の月額世帯収入の目安は15万円程度で、レジャーや教育の支出も増えています。

ホーチミン思想の影響で、ベトナム人の愛国心の基本を成すのは家族。大事なものは「一番は家族、二番は健康、三番は仕事」と身近な部分を大切に、何かあれば「団結!」の声が上がります。いざというときの団結力は侮れないものがあります。

次のページへ続く

## 特別講演続き

## 地域、世代で大きく異なる価値観

同じベトナムでも地域、世代、収入によって価値観は異なり、どこをターゲットにどうアプローチするかはビジネス上の大事なポイントです。特に地域差は大きく、北部は政府のお膝元で政治、文化の中心地。南部は市場経済で自由な発想で動いている印象が強い。北は保守的で、企業や商品に対する好感度や信用が口コミでつくられる傾向が強く、地域貢献型の企業が成功しています。

世代による価値観は1975年のベトナム戦争終結を節目に、戦中世代(60代以降)、戦後世代(40~50代)、新世代(20~30代)でかなり違います。例えば、戦後世代は自分が子ども時代にできなかった習い事を我が子にさせたいという思いが強いですね。

日本人が知っておくべきベトナムの国民性を3点挙げれば、第一は細かいことは全く気にしないというモノに対する考え方。1,000部発注した印刷物が1,200部ほど納品され、そこから良いものを選べばいい、という感覚がある(笑)。第二は時間の感覚で、予定通りにならないことが非常に多い。第三は色、デザイン、味の好み。概してカラフルでファンシーなもの、甘いものが好まれる。日本の食品もベトナムの嗜好に合わせて成功する例が数多くあります。

## カフェ、広告媒体、翻訳絵本に取り組む

私が取り組む3つのビジネスをご紹介します。第一は日本人をターゲットにしたカフェ「安南パーラー」の経営で、ハノイ旧市街で日本語が通じて旅行者が安心できる情報センター的な場所を提供しようと4年前に開設し

ました。家賃が高く、契約も不安定なため、物件探しは大変でしたが、サービスアパートメントの1階を借り、収益を上げるため、おみやげ開発にも乗り出しました。今ではその商品のラスクが人気を集めています。

第二のビジネスはベトナム人対象の広告媒体の制作で、2016年創刊の「アドベンチャー・ジャパン」です。年4回発行で日本の観光情報を発信していますが、紙媒体とIT(ホームページとフェイスブック)の共存をどうするか、過渡期にきています。ベトナムは日本よりIT重視で、最も利用されるSNSはフェイスブック。私たちも職場でメッセージングを活用しています。

第三の活動は日本語の絵本を翻訳してベトナムで販売すること。私のパートナーのベトナム人女性が日本の絵本に惚れ込み、国内で紹介したいというのがきっかけで、2017年に初出版しました。今では26種類20万4千冊を発行し、多くの日本企業の支援を得て、格安で販売しています。書店以外の販売ルートを開拓し、最も好調なのはオンラインショップ。管理システムの利便性や手数料の安さなどその利点は多く、新しく進出するビジネスとしても有望だと思います。

最後にベトナムでの成功の秘訣を。まず、異文化であることを理解すること。そしてスピード感ある実行力と臨機応変の対応力が必要です。私がベトナムで仕事を続けてこられたのはパートナーの支えのおかげで、家族的で対等な関係を構築できたから。来日するベトナム人も増えていますが、交流には相互の尊敬と感謝が大切だと思います。

## ★トークセッション

## ベトナムの女性たちに支持される北海道の魅力・北海道の女性たちにアピールしたいベトナムの魅力

勝 恵美氏 加藤肇子(dec参事)

## 道北の旅で魅力再発見

加藤 20年ぶりに来道した勝さんを道北方面2日間の旅にお連れしました。1日目は「絵本とまちづくり、ナイトライフ」がテーマ。深川道の駅「ライスランドふかがわ」→剣淵町「絵本の館」→旭川の絵本専門店「こども富貴堂」→「星野リゾートOMO7旭川」宿泊。2日目は「アートツーリズム、農村景観」で「北邦野草園」→「雪の美術館」→美瑛町「北西の丘展望公園」→上富良野町「後藤純男美術館」→「十勝岳温泉カミホロ荘」というコース。4月は北海道観光にとってショルダー・シーズンですが、どうでしたか。

勝 雪も雄大な山々もベトナムでは珍しく、大きな魅力です。特に青空に白い山は感動的。夏でも雪や氷の観察ができる「雪の美術館」は人気間違いなしでしょう。「北邦野草園」で見たアイヌのチセはベトナムの少数民族の民家と共通点を感じたりして興味深い。食事で北海道の幸を楽しみましたが、ベトナムは宗教的な制限はないものの食に保守的な人もいるので、それをどうフォローするかが課題ですね。

## 少数民族の人々の暮らしにふれる楽しみ

加藤 日本に来てもらうばかりでなく、日本からベトナムを訪れるというバランスも大事ですね。昨年2度ほどベトナムを訪れ、滞在したサパはハノイから北へ高速バスで5時間の山岳リゾートのような地域。住民のクロモン族の女性は刺繍、織物など本当によく動く。男性の盛装も手の込んだ刺繍などで見事です。日本のアイヌの人と現地の少数民族の人々が親しく交流しましたが、その様子は感動的でした。

勝 少数民族の手仕事の伝統は徐々に衰えており、それを残す工夫も必要でしょう。日本のアイヌの人々はその文化を海外に発信する機会が増えればいいですね。

加藤 ベトナムの30代のOLさんなら、どのよ

うな北海道旅行を計画するでしょうか。

勝 思いついたら出かける感覚で予約などは直前でしょうね。情報豊富な英語のサイトでメジャーな観光地を調べ、買い物や伝統的な衣装を着る体験をSNSでアップしたいのでは。食事はジンギスカンやカニ、ソフトクリームが人気を集めそう。ただ、ベトナムに比べて日本の食事は野菜が少ない。これは工夫の余地があるのでは。

## 会場の質問に答えて

さまざまな角度の質問が挙がりましたが、ツーリズム関連の主な質疑は次の通り。

Q1ベトナム人の旅行単価は:10~20万円のパッケージツアーが多いのでは。買い物にもお金をかけ、日本人がかつて欧州旅行でブランド品を買った感覚と似ています。Q2紅葉は観光の魅力になるか:桜が一番だが、リピーターには紅葉も魅力的。ただ、いろいろなイメージを売ると北海道イメージが分散するのでは。Q3温泉の認知度、魅力は:裸で他人と一緒に入浴する習慣はないので、万人向けではないが、健康に良いなど効果を強調すれば可能性はあると思う。Q4旅行のトレンドにインフルエンサー(マーケティング)の効果は大きい:メディアは分散しており、費用もかかるので、日本ほど行われず影響力はないが、今後は活用されるかもしれない。Q5日本の観光客におすすめの地域は:中部の古都ホイアンは街並みが美しく安全。カフェ文化も魅力的です。



会場の様子



文責:dec